『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（一）

植木久行

序

筆者は、ここ二、三年、中國文學の演習に『和漢朗詠集』に收める唐詩をとりあげた。そして川口久雄譯注『和漢朗詠集』（岩波・日本古典文學大系、一九七六年十二刷、以下、川口注などと略稱）をテキストに、一首ずつ丁寧に讀みすすんだ。[1] より新しい譯注書である大曾根章介・堀內秀晃『和漢朗詠集』（新潮日本古典集成、一九八三、漢詩文の擔當者にちなみ、大曾根注などと略稱）も同時に參照したが、唐詩の典據の全文は未收載なため、唐詩演習のテキストとしては不充分に感じられた。また、私見によれば、その頭注や「典據一覽」の條には、約十八年前に成る川口注の誤りをそのまま踏襲している場合が案外少なくないようである。ちなみに、拙稿の發表が遲れる卷下のなかから、二書に共通する誤讀・誤解と思われる條を任意にとりあげ、その一端を垣間見てみたい。詩歌番號は川口本に據る。

●四三五番「水面風駈瑟瑟波」の「瑟瑟」の解釋……川口注に「波だつ音の形容」（大曾根注も同じ）とするが、ここは音ではなくて、瑟瑟（碧珠や群青色の青金石〔ラピス・ラズーリ〕の類）のごとき青い波の意で、色彩を表す用例と考えるべきであろう。つまり、白居易の「暮江吟」詩[2]（卷19）の「一道の殘陽　水中に鋪き、半江は瑟瑟　半江は紅なり」と同例である。[3]

●四五六番「舟夜　內に贈る」詩に對して、川口注は「家の妻に贈る」、大曾根注は「舟旅の狀況を家に書き送った作」と說明する。しかし、この詩は元和十年（八一五）、江州（江

西省九江市）へ左遷される途中の作であり、このとき、白居易は妻を同行していた（「舟行」〔巻6、巻7〕「發商州」〔巻15〕詩など）。しかも、遠く離れた人に詩をおくる場合は、「贈」ではなく「寄」の字を用いるのが原則。大曾根注は誤りであり、川口注も大曾根注と同意とすれば、誤りとなろう。

●五三一番「〔同諸客〕題于家公主舊宅」という詩題の訓讀……川口注は「家公主の舊宅に題す」と讀み（大曾根本も同じ）、「陳の家公主という皇女の舊宅を詠ずる」と說明するが、詩題の訓讀は「于家公主の舊宅に題す」と讀むべきところ。于家公主とは、于季友に嫁いだ憲宗の長女（永昌公主）を指す（宋の彭叔夏『文苑英華辨證』巻九參照）。公主は元和年間（八〇六～八二〇）沒。詩は大和七年（八三三）に成るので「舊宅」という。川口注の「陳の家公主」云々は全く理解しがたい。

●五八九番「鉢塔院の如大師」（原注…師年八十三、云々）の「如大師」……二人とも如滿大師を指すとするが、智如大師の誤り。白居易の「東都十律大德長聖善寺鉢塔院主智如和尚茶毗幢記」（巻69）に、「大和八年（八三四）十二月二十三日、終於本院、報年八十六」とある。これによれば、詩の作られた大和五年（八三一）當時、智如和尚は八十三歲となり、原注の年齡記載と一致する。他方、如滿（佛光）和尚は、白居易の「佛光和尚眞贊」（巻71）によれば、當時、八十歲である。

●七五四番「人間禍福愚難料、世上風波老不禁」の「老不禁」の解釋……川口本は「老いても禁ぜず」と讀み、世の荒い波風（艱難）は「年寄りになったからとて容赦しない」と譯し、禁を「止む」意に解釋するらしい。大曾根注もほぼ同じ。しかし、この禁は「堪ふ」の意。年をとったので禁えられないことをいい、かくて「人間の禍福は愚かにして料りがたし」の上句とスムーズにつながることになる。しかもこの「禁」は韻字で、平聲に讀むべきところである。禁字は耐える意味では平聲、止める意味では去聲に讀むのが原則（『廣韻』[4]參照）。

●七七四番「江南の物を問ふ」詩の「王尹橋傾いて雁齒斜なり」という句の「王尹橋」の解釋……川口注に「姑蘇〔蘇州のこと―引用者注〕にある橋の名」とあり、大曾根注も同じであるが、いずれも誤り。これは、寶曆元年（八二五）、舊友の河南尹・王起が、自宅を購入して資金をほとんど使いはたした白居易のために、洛陽の履道里内の新居に造ってあげた橋をいう。それで「王尹（河南尹の王起）の橋」と稱したのである。

これらの詳細な考證は、後日發表豫定の拙稿にゆずる。

今日、唐詩に對する研究はめざましい。しかし日本文學の研究者にとって、近年の新しい研究成果を廣く吸收することは、時間的にも資料的にも、かなり困難である。中國古典文學、とくに中世詩を專攻する筆者自身も、地方に住むため、資料の收集や圖書の閲覽の面でかなり難澁し、今なお未見のものも多い。ともあれ、所收の唐詩は、まぎれもなく純粹の〝唐詩〟である。したがって、わが國で編纂された選集に收められる作品であるとはいえ、一度、本來の唐詩の文脈（コンテクスト）にもどして理解しなおしてみることも、當然必要な作業であろう。本來の意味が明確になりさえすれば、わが國における長い解釋史や享受史にひそむ種々の問題點もおのずから顯在化し、新たな研究課題も起こるに違いない。筆者は、そのための基礎研究を、おもに「川口譯注本」に對する補訂という形で行なう。もちろん、より新しい「大曾根譯注本」に對しても、充分注意を拂いたい。

白居易詩の作成年代については、

○花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九七四年再版）

○朱金城『白居易年譜』（上海古籍出版社、一九八二年）

○王拾遺『白居易生活系年』（寧夏人民出版社、一九八一年）

などを參照し、それぞれ花房・朱・王と略稱した（別の箇所では、花房『批判的研究』・朱『年譜』・王『系年』などと略稱）。

また、『和漢朗詠集』の注釋書は、前掲の二書以外に、

○信阿『倭漢朗詠集私注』（內閣文庫藏、室町期古寫本）[5]

○注者未詳『倭漢朗詠抄注』（細川家永青文庫叢刊第十三卷、汲古書院、一九八四）

○注者未詳『倭漢朗詠集注』（六地藏寺善本叢刊第四卷、汲古書院、一九八五）

○永濟・季吟『和漢朗詠集註』（高野辰之編『日本歌謠集成』第三卷、春秋社、一九二八）

○金子元臣・江見清風『和漢朗詠集新釋』（明治書院、一九五九年八版（改修版））

○柿村重松『和漢朗詠集考證』（目黑書店、一九二六）

○柿村重松『倭漢新撰朗詠集要解』（目黑書店、一九三一）

の各書を參照した。それぞれ、『私注』『抄注』『六注』『集注』『新釋』『考證』『要解』などと略稱する。また、佐久節譯注『白樂天詩集』全四册（續國譯漢文大成、一九二八～三〇、いま日本圖書センター影印『白樂天全詩集』に據る）の勞作は、佐久注と略稱する。なお、上記以外の參考圖書は、初出のところ

に略稱を注記することもある。

朱金城『白居易集箋校』が、まもなく上海古籍出版社から刊行されるという。中國人の手に成る最初の全面的な校注として期待される。ちなみに、筆者の補訂稿はほぼ全般にわたって基礎調査を終えたが、多大の紙幅を要するため、機會をとらえて隨時發表し、早期に完結することを願っている。

〔注釋補訂稿〕

●四番、白居易「府の西池」（詩題のみ一般的な訓讀をする）「柳無氣力條先動、池有波文氷盡開」

○大（太）和五年（八三一）、作者六〇歳、東都洛陽にある河南府の役所での作（花房・朱・王）。詩題の「府」は河南府の役所、いわゆる河南府廨を指す。詩題は「河南府廨內の西側にある池」の意。白居易は前年（八三〇）の十二月、河南尹（東都の知事）の要職に任ぜられ、履道里（里は坊ともいい、周圍を牆壁でかこまれた一ブロック）の自宅からここへ移り住んだ。河南尹は西都長安を治める京兆尹につぐ、地方官中の大官で、重責をになう。官品は從三品。ただし、「牛僧孺と志向を同じくする、宰相の李宗閔の要請によって、止むなく河南尹となったものの、白居易にとっては、本意ではなかった」という（花房英樹『白居易研究』〔世界思想社、一九七一〕三七四頁）。『舊唐書』卷三八、地理志の河南府の條に、「（貞觀）八年（六三四）、治所を河南縣の宣範坊に移す」とある。宣範坊の位置は、松浦友久・植木久行『長安・洛陽物語』（集英社、一九八七）二二七頁の「隋唐洛陽城平面想像圖」、もしくは、拙著『唐詩の風土』（研文出版、一九八三）卷末の「唐洛陽城圖」など參照。河南府廨は、宣範坊の半坊分の大きさを占める（『元河南志』卷一、徐松『唐兩京城坊考』卷五）。宣範坊は、洛水の南のほぼ中央部に位置し、その大きさは「東西南北廣さ三百步」（四四一メートル、一步は一・四七メートル）の正方形である。ただし、近年の考古調査によれば、ほぼ五〇〇メートル四方であり、坊內は幅十四メートル前後の十字街によって四等分されていた。要するに、河南府廨は約五〇〇メートル四方の約半分の大きさをもつ。當時、一坊內には、一般住宅が少くとも千戶以上、平均して二千前後あるといわれることから考えると、敷地の大きさがおのずと理解される。

○〔無氣力〕　白居易の「洛中の春遊、諸親友に呈す」詩（卷31、後集卷12）には、「春娃（若い妓女）氣力無し」とある。これは、なよなよとして風にも堪えかねる風情の妓女の形

容。「氣力」は、ほぼ「力」の一字と同意。同じく「曲江の早春」詩（巻14）に、「曲江の柳條　漸く力無し」、同「長安の春」詩（巻18）に、「青門の柳枝　軟かにして力無し、東風吹きて黄金の色を作す」などとある。つまり、「氣力無し」とは、冬枯れの時期とは異なる、早春の柳枝が内にたたえはじめた獨特のしなやかさを形容し、かすかな春風にも早くもゆれ動いてみせる、と喜ぶのである。いわば、春のしなやかな美しさ（柔媚）そのものの象徴を、早春の柳枝に見てとったわけであろう。『抄注』に、「上句ハ柳ノハシメテメクミタルカ　ハルノ風ニウチナヒキタルサマノ　シナヤカニヨハキ意也」という。ちなみに、『六注』にいう、「意ハ柳ノ葉ノ未ダ出デズ。故ニ條先ヅ動クト云フ也」「一義ニハ、柳ハ諸木ヨリ性ヨハキ故ニ、枝先ヅ動クト云フ也」と。

○〔先〕　釋大典『詩家推敲』巻上に、「已（すでに）ノ意アリ。然レドモ已ハ訖（おは）ルヨリシテイヒ、先ハ早キヨリシテイフ」[11]とある。

●五番「今日不知誰計會、春風春水一時來」

○四番と同一の詩（轉・結句）

○〔今日〕　『六注』に、「今日ト者（は）、立春ノ日也」とある。ただし、立春は前年の閏十二月十五日らしい。

○〔計會〕　「會計」[12]（〔出納を〕計算する、ソロバンをはじくなどの意）と同意の連文（一義を共有する二字が、その一義を紐帶として結びつき、分訓できない熟語）。會の發音は、kuài[13]。『抄注』などに「カゾヘアワセテ」と譯すのは、この立場である。田中克己『白樂天』（集英社漢詩大系、一九六四）には、「物事をよくきわめて考える」と注し、上句を「今日のことは誰が計畫したことだろう」と譯す。一説に、唐代の俗語と見なす。鹽見邦彦「唐詩俗語新考(2)」[14]には、

もと法制用語として使用されたもので、「計會」は「しめくくりをつける」意で使用される。唐詩での使用例は、以下の二例のみである。

として、二〇四番の白詩「蕭颯涼風與悴鬢、誰教計會一時秋」と方干の詩の用例をあげる。「法制用語」云々の説の論據は未詳。本詩(5)番の用例は二〇四番のそれと全く同じく、したがって、少くとも唐詩のなかには、三首以上の用例が存在することになろう[補注1]。川口『文庫』本も、「計會は唐代の俗語。『物ノケツケ（結計）サンヨウ（算用）ヲシテ、出デ入リノツヂヲアワスル』（米澤本『詩學大成抄』六）」[15]とする。しかし、「計會」の語自體は先秦の書にも見え、詩歌にあっては、

晉樂奏するところの「西門行」詩[16]のなかに、「自非仙人王子喬、計會壽命難與期」とある。必ずしも俗語とはいえないようである。

●九番　元稹「樂天に寄す」　「氷消田地蘆錐短、春入枝條柳眼低」

○長慶四年（八二四）、作者四六歳、越州（會稽、浙江省紹興）での作（花房英樹・前川幸雄『元稹研究』[17]、卞孝萱『元稹年譜』[18]）。當時、元稹は浙東觀察使・越州刺史として越州に滞在していた（在任期間は長慶三年〔八二三〕八月から大和八年〔八二六〕八月まで）。就任後、はじめて迎えた春の詩である。このとき、七歳年長の親友白居易は杭州刺史であった。杭州と越州とは、浙江（錢塘江）をはさんで西と東につらなる土地。二人はしきりに「詩筒」を往復させて唱和する。白居易の「微之の寄せらるるに答ふ」詩（卷23、後集卷6）は、本詩に對する次韻詩（原作の韻字をそのままの順序で用いた和韻詩）である（同年、杭州での作）。

○〔柳眼〕　元稹の「歌詩語彙索引」（『元稹研究』所收）によれば、元稹詩の用例は、本詩(9)番の例を含めて五つある。元和十一年（八一六）の作「生春二十章」（其九）[19]に「春は生まる　柳眼の中（うち）」（卷15）とあり、また、本詩と同年の作「浙西の李大夫に寄す四首」（其一）にも「柳眼　梅心　漸く春ならんと欲す」（卷22）とあるように、「柳眼」は春の訪れを告げる典型的な早春の風景であった。「柳眼」の舊注には、從來、①「コノメ（木の芽）ノハル」こと（『抄注』『六注』）、②「柳ノ葉初メテ生ジ出ヅルノ皃（かたち）、物ノ目ニ似タリ」（『私注』）の二説があり、①が通説。大曾根注に「柳の新芽が眼の形に似ていること」とあるのは、明らかに①の立場である（川口注も同じ）。また、一九八〇年刊『辭源』修訂本（北京商務印書館）は、②の立場に據り、「初生柳葉、細長如人睡眼初展」と説明する。つまり、生じたばかりの柳の若葉は細長くて、眠そうな目を見開いたばかりのようだ、というのである。唐末・五代の韓鄂撰とされる『歲華紀麗』卷一、二月の條に、「蘭芽は玉を吐き、柳眼は金を挑（かか）ぐ」とあるのは、「蘆錐」や「梅心」と一緒に用いられることともに、①の「柳の新芽」説を補強する用例といえようか。しかし、白居易「楊柳枝詞八首」（其七）に、「葉は濃露を含みて啼眼の如し」（卷31、後集卷12）とあるのは、②の「柳葉」説に近い。ところが、白居易はまた、別の詩（「和微之春日投簡陽明洞天五十韻」卷26、後集卷9）のなかで、「柳眼は黄絲の顆（よいと）」と歌う。これは、①②

というよりは、早春の柳花（45番の條参照）をいうらしい。杜甫の詩（「曲江陪鄭八丈南史飲」）の「黄柳の花」に對する清の顧宸の説（『杜詩詳注』巻6所引）に、「柳始めて嫩蕊を生ずるや、其の色は黄。故に〈黄柳〉と曰ふ。未だ葉あらずして先づ花さく」云々とある。早春の「柳花」の解説として注目すべき記述である。これは、色彩的に前引の「柳眼は金を挑ぐ」にも通じ、①の「新芽」説と「柳花」説とは、必ずしも矛盾しない性質のものかも知れない。

ちなみに、李商隱「二月二日」詩の「花鬚　柳眼　各々無賴」[20]の句をみてみよう。王汝弼・聶石樵『玉谿生詩醇』（齊魯書社、一九八七）は、「柳眼」を「柳芽如眼」と注して①の立場をとる。これに對して、安徽師範大學中文系古代文學教研室選注『李商隱詩選』（人民文學出版社、一九七八）は、「柳葉初生時細長如眼、稱柳眼」と説明して②の立場である。わが京大人文研の李義山七律注釋班の手に成る「李義山七律集釋稿(3)」（『東方學報』56、一九八四）は、本詩(9)や前掲の白詩「楊柳枝詞」の用例などをあげて、「柳の若葉をいうようだ」とし、柳の新芽説には全く觸れていない。ただ「集釋稿」では、元稹の「遣春三首」（其二）「柳眼開渾盡、梅心動已闌」の用例を、「柳の花をさすかもしれない」とする（荒井健執筆）。ただし、前引の白詩「柳眼は黄絲の顆」の句には觸れていない。また、槐の新葉を兎目（うさぎの目）にたとえる表現（「槐之生也、季春五日而兎目、十日而鼠耳、更旬而始規、二旬而葉成」『本草綱目』巻三五、槐）も注意されてよい。一見、理解しやすい詩語「柳眼」も、充分吟味されるべきであろう。

●十番　白居易「潯陽の春三首」の一、「春生る」[21]「先遣和風報消息、續教啼鳥説來由」

○「元和十二年作」の原注がある。つまり、元和十二年（八一七）、作者四六歳、江州（潯陽、江西省九江市）での作。江州司馬在任（花房・朱・王）。

○〔消息〕　『抄注』に、「春ノ來ルヲ客ノキタルニタトヘテ云フ也」と解説するのは面白い。確かに「消息」の語は、六朝以來、尺牘のなかでの常套語（陸雲「與兄陸雲書」など）。また李白「早春　王漢陽に寄す」詩に、「聞道く春還ると　未だ相識らず、走りて寒梅に傍ひて消息を訪ふ」とある。

○〔啼鳥〕　川口・大曾根本は、ともに「鶯」と譯出する。これは、『六注』に「鶯ノ鳴ク事也」とする説などを踏襲するが、唐詩としては、もちろん、鶯に特定できまい。

○〔來由〕　連文。「由來」と同義。(補注2)『六注』に「春ノ來ル由」と考えるのは、望文生義の一種であろう。ただ、この來由の「由」は韻字である。白居易「感興二首」(其一)の「吉凶　禍福　來由有り」も、同じく韻字の用例(卷32、後集卷13)。暖かい風が春到來の前ぶれ、小鳥のさえずりが春の發生・到來の經緯や原因・情況などを語りきかせる、というのであろう。

●十八番　白居易「哥舒大が贈らるるに酬ゆ」　「花下忘歸因美景、樽前勸醉是春風」

○貞元二十年(22)(八〇四)、作者三十三歳、都長安での作(花房・朱)。祕書省校書郎在任。川口注に「哥」を「歌」に誤植。哥舒大とは哥舒恒のこと(徐松『登科記考』卷15など)。哥舒は複姓。ただし、「恒」の名は一に「煩」(23)に作る(岑仲勉『唐人行第錄』〔上海古籍出版社、一九七八年再版〕哥舒大煩の條など參照)。「大」とは、いわゆる排行(一族間の、同世代の男たちの年齢序列。兄弟・從兄弟を通算して、何番めにあたるかを示す。「輩行」とも書く)の第一番めを指す。唐代、親しい友人間では、この排行で呼びあうことが多い(24)。太宰春臺『斥非』に、「唐人相呼ぶに行次を以てす。王大・王二・沈三・沈四・張五の類の如し。詩題にも亦た多く此れを稱す」とある。

この詩には、題下に「去年與哥舒等八人、同〔共〕登科第、今敍會散之〔愁〕意」の原注がある(一本に「共」「愁」の二字なし)。この訓讀は、一般に「去年、哥舒等ら八人と同じく科第に登る。今會散の意を敍ぶ」(大曾根「典據一覽」)となろう。川口の訓點も同じ(出典一覽)。文中の「科第」とは、後述する吏部銓選(官人任官試驗の一種)の博學宏詞科と書判拔粹科を指し、いわゆる進士科ではない。傅璇琮の勞作『唐代科擧與文學』(陝西人民出版社、一九八六)の第十一章(三〇八頁)に、進士科及第のことと捉えるのは誤解。ところで元稹の「哥舒大少府の、同年の科第に寄するに酬ゆ」(卷16)の自注によれば、去年(貞年十九年)の吏部銓選には、〔博學〕宏詞科に呂炅(けい)・王起、〔書判〕拔萃科には、白居易・李復禮・呂穎(25)(一作頴)・哥舒恒・崔玄亮・元稹の、合計八人の及第者(26)が出ている(『登科記考』卷15參照)。ちなみに、宏詞科と拔萃科は、一般に進士科及第者(27)が受ける幹部候補生用の別格の任用試驗(吏部試)。いわば、進士科に及第した者が、さらにエリート・コースに乘るために挑戰する採用試驗であった(28)。宏詞科は通常、詩賦三篇、拔萃科は判(司法上・行政上の問題について判斷を下す文章)三篇を課し、文學を主とする宏詞科のほうが重

んじられた。『通典』巻15、選擧、歴代制下や、村上哲見『科擧の話』（講談社現代新書、一九八〇年、六九頁）、前掲の傅璇琮『唐代科擧與文學』第十七章など參照。しかし、白居易は祖父の名「鍠」が「宏」と同音であるため、自ら宏詞科受驗をあきらめたのである（李商隱「白公墓碑銘幷序」）。

ところで、貞元十九年の同年の科第者が「八人」であるとすれば、原注の「哥舒等八人と」の句は事實にあわず、「八」は「七」の誤訛ではないかと疑われる。あるいは、「（私は）哥舒等と八人」と讀むべきか（『集注』參照）。やや無理な訓讀であろう。

○本詩の二句は、宏詞科・拔萃科の難關を突破した八人が一緒に祝賀會を開いて樂しんだことを回想する句である。ちなみに、「因」と「是」の二字が互文互用される例を一つあげる。白居易「早に出で晩に歸る」詩（卷28、後集卷10）に、「早起或因攜酒出、晩歸多是看花迴」とある。

●十九番　劉禹錫「春日　懷ひを書し、東洛の白二十二・楊八の二庶子に寄す」　「野草芳菲紅錦地、遊絲繚亂碧羅天」

○岑仲勉『唐人行第錄』・朱金城「《白氏長慶集》人名箋證」（『中華文史論叢』一九七九―一）によれば、長慶四年（八二四）、作者五三歳、夔州（四川省奉節）での作。夔州刺史在任。「白二十二」は白居易、「楊八」は楊歸厚。白居易は長慶四年五月、太子左庶子分司東都となり、楊歸厚も當時、太子右庶子であった。白居易と劉禹錫は年齡が同じであり、晩年の最も親しい詩友仲間であった。岑・朱の「長慶四年」説には、いささか疑問がある。白居易の太子左庶子への任官は同年の「五月」であり、しかも、杭州刺史をやめて洛陽に到着・就任したのは秋であった。この事實は、「春日　懷ひを書し、東洛の白二十二……」の語と合わない。翌年の寶曆元年（八二五）の作と考えるべきであろう。郁賢皓『唐刺史考』[29](3)には、『册府元龜』卷七〇〇に「長慶四年、〔壽州〕刺史楊歸厚……」とある記事にもとづいて、楊歸厚は長慶四年、壽州刺史であったことを指摘する。寶曆元年作とすれば、劉禹錫は和州刺史に在任中である（前年の夏、和州刺史に轉任）。白居易は寶曆元年三月四日、蘇州に任ぜられて洛陽を離れる。和州は今の安徽省和縣付近。

○〔野草〕　「野」は『說文』卷十三下に「郊外なり」とあり、「城」の反意語。「芳菲」は下句の「繚亂」とともに双聲（語頭子音を同じくする熟語）。李賀の「少年樂」詩に、「芳草　落花　錦の如き地」とある。

○〔遊絲〕　梁の沈約「三月三日率爾として篇を成す」詩に、「遊糸　空を映いて轉び　高楊　地を拂ひて垂る」とあるのは、古い用例の一つ（『文選』巻30）。鈴木修次『人生有情―警策のことば』（東京書籍、一九七七）の「遊糸」の條にいう、

「遊糸」は實は、空中にはき出されてただよう蜘蛛の糸の類である。大量にはき出された蜘蛛の糸が、ふわふわと空中をただよって、舞いおりてくるのであって、大陸の春によく見られる風物なのである。杜甫の全集の舊注（九家注）に、「遊糸とは、蛛糸の遊散するものなり」（宣政殿退朝、晩出左掖」の注）とあるのが正しい。

また同書には、山本健吉『遊糸繚亂』を引いていう、

クモがたくさんの卵を生むところが映り、それが大勢のクモの子にかえったところが（テレビに）映った。これではクモも過密狀態で、彼らは過疎地帶を求めて引っ越ししなければならない、などとアナウンサーが諧謔をいい、「あれ、ゴサマーを映すのかな」と目をこらしていると、果してクモの子たちは草の葉の尖端まで登ってゆく。行きどまりまで來て、腹から糸を出すと、それは上昇氣流を捕えたらしく、草につかまっていたクモの子はあっという間に飛び去って、見えなくなってしまった。

山本健吉の紹介は科學的で興味深い。ただ「中國の文學者たちは、糸を引いてとび出してゆくクモにはまったく注意を拂わず、もっぱら空中にただよう糸の方に關心をむけている」（鈴木修次の同書の解説）。ただし、王建「春詞」には、「天絲軟弱にして虫飛揚す」とある。

●二十番　白居易「東都留守令狐尚書の赴任するを送る」

「歌酒家家花處處、莫空管領上陽春」

○大和三年（八二九）三月、作者五八歳、長安での作（花房・朱・王）。刑部侍郎在任（三月の末、刑部侍郎をやめて、太子賓客東都分司となる）。「令狐尚書」は戸部尚書令狐楚（七六八～八三七）を指す。令狐は複姓。大和三年三月辛巳朔（一日）、東都留守となる（『舊唐書』巻17上の文宗紀。同年十一月まで在任）。東都留守とは、東都洛陽にいて、不在の天子に代わって留守をあずかる要職（『唐會要』巻67、留守の條）であり、宰相や節度使などの前歴をもつ者、もしくはこれに準ずる重臣・高官が任ぜられた。中唐以降、常置されたらしく、副都をあずかる最高權力者である。[30]

○上句は當句對[31]（句中對）。「家家」はすべての家、「處處」は到る處の意。白居易「楊柳枝詞八首」（其一）に、「六么

水調　家家唱ひ、白雪　梅花　處處吹く」（巻31、後集巻12）とあるのも、對句の用例。

○〔上陽〕　川口注は、「東都洛陽のある縣の名。これをせまく洛陽の宮殿の名に解するのはよくない」とし、「上陽縣の春」と譯す。また大曾根注も、「東都洛陽にある縣の名。『左傳』僖五に〈晉侯復道を虞に假り以て虢を伐つ（中略）晉侯上陽を圍む（上陽、虢國の都なり。弘農陝縣の東に在り）〉」とし、やはり「上陽縣の春」と譯す。しかし、唐代の東都洛陽城内は、河南縣と洛陽縣の二つに分掌されており、二十縣から成る河南府内にも、「上陽縣」は存在しない。[32] 川口注の「東都洛陽のある縣の名」は誤りである。大曾根注のいわゆる「上陽」は、今の河南省陝縣の東を指し、洛陽の西、一〇〇キロ以上のかなたである（譚其驤主編『中國歷史地圖集』第一册、地圖出版社、一九八二、「22～23」の地圖參照）。その誤りもまた明白であろう。佐久注に「洛陽に在る宮の名」とあるほうが妥當である。より嚴密にいえば、唐の前期、東都洛陽の政治の中心となった壯麗な上陽宮の名を借りて、「洛陽」を表す用例と考えるべきであろう。高宗は末年、上陽宮に住んで政務をとり、則天武后も高宗在世當時から、この宮殿で政治をとった。いわば、一時期、大唐帝國の中心になった榮光の宮殿であった（『唐詩の風土』八五頁）。[33] なお西岡市祐「新樂府《上陽白髮人》の《綠衣監使》について」には、「洛陽上陽宮堂宇配置想定圖」をのせており、興味深い。玄宗も一時期、上陽宮に住んだことがある。[34] もちろん、中唐期には、かなり荒廢して「上陽の白髮人」の舞臺[35]となったが……。この意味で、柿村『要解』に、「上陽は東都卽ち洛陽に上陽宮があるので、洛陽の意味に用ひてある」とあるのが正しい。

○〔管領〕　『抄注』に「スヘ領スト云フ事也」とあり、川口注も「領有支配すること」とする（大曾根注もほぼ同じ）。この解釋は、東都留守の要職に赴任する送別の言葉としてふさわしい。ところが、王鉄『詩詞曲語辭例釋』增訂本には、「管領」の語には字面どおりの「照管」「看顧」（世話をする）の意味のほかに、「消受」（享受する）「欣賞」（めでる）を意味する動詞の用法があるとして、本詩の例句を「这是奉勸對方多多領略洛陽風光、不要只限一處」（くれぐれも存分に洛陽の風光を味わいめでて、ただ一箇所に限定してはなりませんよと、お勸め申しあげる）と譯し、「空」は「只」（ただ）と同義であるとする（九三頁）。

「空」の字は、「只」と解するよりは、やはり「洛陽の春をめで樂しむせっかくの機會をむだになさりませんように」

と、「空」の基本義に捉えるほうがよいだろう。『六注』に「空トハ、イタツラト云フ事也」とある。ただ「管領」を「味わいめでる」意とする點は、充分注目すべき指摘である。これは、同じ白詩「早春　晩に歸る」詩（巻23、後集巻6）に、

金谷風光依舊在　　金谷の風光　舊に依りて在り
無人管領石家春　　人の　石家の春を管領する無し

とある表現と關連して興味深い。金谷は西晉の石崇の金谷園をいう。[36]

○劉禹錫に「樂天の《令狐相公の東都留守に赴くを送る》に同ず」という詩が殘る（同年の大和三年、長安での作）。また張籍にも「令狐尚書の東都留守に赴くを送る」詩がある（白詩と同時期の作）。

●二七番　白居易「春中、盧四周諒と華陽觀に同居す」

「背燭共憐深夜月、踏花同惜少年春」

○永貞元年（八〇五）、作者三四歳、都長安での作。校書郎在任（花房・朱）。川口・大曾根ともに詩題の人名を「盧四・周諒」の二人とするが、これは誤り（王『系年』〔五九頁〕も誤る）。排行が四である盧周諒のこと。たとえば、白居易の「元八宗簡が同に曲江に遊びし後、明日贈らるるに答ふ」詩（巻5）の「元八宗簡」の表記と同じ。その傳記は未詳。ただ岑仲勉の「讀全唐詩札記」に、「按ずるに、新表七三上（『新唐書』巻七三上、宰相世系三上）に、（盧）道將の後に（盧）周諒有るも、歴官を著さず」とある（『唐人行第錄』二四七頁）。本詩の第六句「芸閣（秘書省）　官微にして貧を救はず」によれば、當時、盧周諒は校書郎であった。

○〔華陽觀〕　長安の永崇坊（街東）にある道觀の名。大曆十二年（七七七）、華陽公主[37]（代宗の娘）の追福のために道觀となる。つまり、道觀の名は華陽公主の名にちなむ（『唐兩京城坊考』巻3）。白居易の「春　華陽觀に題す」詩（巻13）の原注に、「觀は卽ち華陽公主の故宅なり。舊き內人（宮女）の存する有り」とある。白居易の「華陽觀の桃花さく時、李六拾遺を招いて飲む」詩（巻13）に「華陽觀裡　仙桃發く」と歌われるように、桃の花の名所であった。『抄注』に、後句を「ニハ（庭）ニチリツモレル花ヲフミテハルノクレヌルコトヲオシム」と解釋する說にしたがえば、その庭の花とは桃の花を含むか。ちなみに、翌年の元和元年（八〇六）、白居易は友人の元稹とともにここにこもり、制擧（皇帝の名による非常の才を求める、高級官僚候補のための特別試驗、天子の親試という形をとる）のために受驗勉强をしている。當時、寺院や道觀

に間借りする人も多かった。

○〔背燭〕　『六注』に、「此ハ月愛センカ爲ニ灯ヲ背テ庭ニ出テ月ヲ詠ス也」とある。張九齢の「月を望んで遠きを懐ふ」詩に、「燭を滅して光の滿つるを憐づ」という。「背燭」は、「焰の方を壁に向くるなり。月を翫ばんが爲に燭を背くるなり」（『集註』、『抄注』もほぼ同じ）と考えるのが通説。田中克己『白樂天』には、「灯をうしろにやって」と譯す。これは、背字を「背なかを向ける」意とする解釋に近い。

ところで、「背燭」の語については、村上哲見「燭背・燈背ということ—讀詞瑣記」（京大『中國文學報』第一册、一九五四）のなかに、興味深い指摘がある（要約）。

背とは、「ともしびが、とばり・びょうぶ、又はかべの背後にある狀態」、もしくは、「それらの背後に移す動作」を示す。意味的には、「遮」（さえぎる）「掩」（おおう）「隔」などに近い內容をもつが、遮・掩はとばりを主にした表現である。これに對して、背は同じ狀態をともしびを主にした表現ではないか。唐の李景亮「李章武傳」にみえる「移燭背墻」（燈を壁の陰に移す）という表現が、原初的な丁寧ないい方であったであろう。

かくて同論文には、溫庭筠「更漏子」の「紅燭背、繡帷垂、夢長君不知」の一節を、「ともしびをほのぐらくかげにしてぬいとりのとばりの垂れこめた臥戸のひとりねの夢のはてしなくさまようを　彼の人は知るや知らずや」と譯す。同『李煜』（岩波・中國詩人選集、一九五九）には、「紅燭背り」と訓讀する。

この村上説に近いものが、近年、中國にも現れている。沈祥源・傅生文『花間集新注』（江西人民出版社、一九八七）には、溫庭筠の例句を、就寢する前の動作の一つ、「掩住燭光」（ろうそくの光をすっぽりおおいかくす）意とし、唐圭璋主編『唐宋詞鑑賞辭典』（江蘇古籍出版社、一九八六）では、さらに「熄滅燭光」として「消す」意に捉える（王明孝執筆）。ちなみに、華鍾彦『花間集注』（中州書畫社、一九八三）は、「在此處掩也、或息滅也」[38]として、兩説を併記する。

しかし、中國でも、背燭の解釋は今日なおゆらぐ。たとえば、李商隱「正月　崇讓の宅」詩の「背燭」に對して、㋑背をともしびの方へ向ける（王汝弼ほか『玉谿生詩醇』）、㋺ともしびの光をおおう—就寢する（劉學鍇・余恕誠『李商隱詩選』[39]）といった具合である。中田勇次郎『歷代名詞選』（集英社漢詩大系、一九六五）は、溫庭筠「菩薩蠻」（其八）の「背窓燭半明」[40]（中田譯—窓にそむけしともしびもひかりかそけく）の句に對し

て、前掲の村上説に對する論評をまじえつつ、次のごとく注する。

燈の光をおおい遠ざけて弱くするために、窓の方に向ける意であろう。わが國の燈臺の古制のものに燈の背後を紙で掩うたり、燈を遮る屏板をつけたものがあり、あるいは中國にもこのような方法があったのではないか。このような形式のもので考えると、極めて簡單に背ける意味と方向を解くことができるのではないか。結果的には「かげる」意でよいが、訓としては「背く」でよく、遠ざける、隔てるというような意に解してよいと思う。

かくて同書には、前掲の「紅燭背」の句を、「紅蠟の燭をむこう向きにしてくらくする。眠りに就くときのさま」と注する。この意味では、王建の「秋夜曲二首」（其二）に、「秋燈向壁掩洞房、良人此夜直明光」（夫が明光宮に宿直するため、燈を壁の方に向け、寢室を閉じて休む）とある表現が改めて注目されてくる。

「背燭」に對する村上・中田の兩説は、ともに成立しそうである。ただ中田説が傳統的な解釋であるのに對して、村上説は、背字に「掩」の字義があることを指摘した卓越さをもつ。類似の表現は一四四番〈背壁燈殘經宿焰〉に見える。この場合、「消す」とする説は、もちろん成立しない。「消す」とする説は、おそらく妥當ではあるまい。

○〔惜〕　魏の張揖『廣雅』釋詁に、「惜」を「愛するなり」とする。喪失するものに對してのいとおしみの氣持をこめる。

●三八番　王維「桃源行」　「春來遍是桃花水、不辨仙源何處尋」

○「時に年十九」の原注によれば、開元五年（七一七）、もしくは開元七年の作。前者は六九九年生年説、後者は七〇一年生年説による。

○〔桃花水〕　陳の張正見「公無渡河」詩に、「棹は折る桃花の水、帆は横たふ　竹箭の流れ」とあり、杜甫の「南征」詩にも、「春岸　桃花の水、雲帆　楓樹の林」とある。[41] ちなみに、川口注に「桃花水」を、「仲春三月、桃の花の盛りの時、雨が多く、川いっぱいに水が流れるのをいう（禮記、月令）」とある。しかし、『禮記』月令篇には、「仲春の月……始めて雨水あり、桃始めて華さく」とあるにすぎず、「桃花水」の語はみえない。また「仲春三月」は「仲春二月」の誤り。『文庫』本も誤る。

●四五番　元稹「襄陽樓に過りて府主の嚴司空に呈上す、樓は江陵節度使宅の北隅に在り」　「拂水柳花千萬點、隔樓鶯舌兩三聲」

○元和五年（八一〇）～元和九年（八一四）、作者三二歳～三六歳、江陵（湖北省）に左遷中の作、江陵府士曹參軍在任（卞『元稹年譜』や花房・前川『元稹研究』）。詩題を、大曾根「典據一覽」に「上府主嚴司空に呈す」と讀むのは誤り。原文は「呈上府主嚴司空」。「呈上」で一つの熟語（連文）。府主の嚴司空とは、江陵節度使の嚴綬（七四六～八二二）を指す。府主は「府公」ともいい、唐代、節度使や觀察使を指す言葉。『舊唐書』卷十四、憲宗紀上の元和六年（八一一）三月の條に、「丁未（一日）、檢校右僕射嚴綬を以て江陵尹・荆南節度使と爲す」とある。荆南節度使は江陵節度使の別稱。したがって、詩の作成年代の範圍は元和六年以降となり、やや縮小する。江陵（荆州）は、上都京兆府（長安）・東都河南府（洛陽）・揚州（廣陵）などとともに、人口百萬級の大都市。長江の中流域にあり、水陸交通の要衝で商業が盛んであった。[42] 安史の亂後、荆南節度使がここに置かれ、『資治通鑑』卷二五三、乾符五年（八七八）の條には、「江陵城下舊と三十萬戸」とあり、人口は一五〇萬近くあったらしい。[43]

○「襄陽樓」　薛鳳生『元微之年譜』（臺灣學生書局、一九七七）には、本詩を元和九年（八一四）、作者三六歳、襄陽での作とする說をとなえていう（要約）、

元和九年（八一四）九月、荆南節度使嚴綬は、檢校司空・襄州刺史・山南東道節度使に改められ（『舊唐書』卷十五、憲宗紀下）、元稹はその從事として襄陽（湖北省襄樊市）に移ったらしい。本詩は、嚴司空の語によれば、嚴綬改官後の作である。[44]

元稹が嚴綬に從って襄陽（襄州）に移った直接の證據はないが、このとき始めて檢校司空に進んだのであり、荆南節度使當時は檢校右僕射であった。元稹の本詩や「奉和嚴司空重陽日同崔常侍・崔郎中、及諸公、登龍山落帽臺佳宴」「遊三寺回、呈上府主嚴司空……」詩などは、いずれも嚴綬が檢校司空に改められた後に作られ、このとき、元稹も襄陽にいた。貶官の場合は勝手に任所を離れることができない。本詩の題下にいう、「樓は江陵節度使宅の北隅に在り」と。頗る解すべからず。續考を待つ。

この薛鳳生の說は、じつは論據が不充分である。元稹の「嚴公行狀」（卷55）には、「尋いで檢校司空を以て、荆南節度觀察支度等使兼江陵尹・御史大夫を拜す」とあり、荆南節

度使就任のさいには、すでに檢校司空であった。しかも襄陽での作と推定した詩題の一つにみえる「龍山の落帽臺」とは、昔、晉の桓溫が重陽節に登高して宴會を開いたとき、その幕僚の孟嘉が落帽したところを指し、その地は今の江陵縣の西北にあった。[46] また「襄陽樓」は、じつはすでに張說の「龍山の靜勝寺に遊ぶ」詩に、「襄陽樓に上る毎に、遙かに龍山の樹を望む」とみえる。陳祖言『張說年譜』（中文大學出版社、一九八四）によれば、その詩は開元五年（七一七）、荆州大都督府長史に在任中の作であり（五一歲）、『光緒荆州府志』卷二六「寺觀」門を引いて、詩題の靜勝寺は江陵城の西にあったとする。[45]

このように考えてくると、「樓は江陵節度使宅の北隅に在り」は、そのまま素直に理解すべきであり、薛鳳生の說は『舊唐書』憲宗紀にとらわれた誤りといえよう。川口注に「襄陽府は今の湖北」とあるのは、柿村『考證』を踏襲したものであろうが、理解しがたい。襄陽樓はすでに述べたごとく、襄陽府ではなく江陵府にある。襄陽の語に捉われすぎたといえようか。

○〔拂水柳花千萬點〕　川口譯に「柳枝が花をつけること千萬點、池の水面に垂れて水を拂い」とあり、大曾根譯に「低く垂れて池の面を拂う柳の枝は千萬の花をつけており」とある。また「柳花」を、川口注は「柳のわた」とし、大曾根は「春さき柳の葉の間に出る穗の形をした黃色の花」とする。詩中の風景は、下句の「鶯聲は已に稀となれる」（『要解』）光景とともに、暮春の景を描寫したことは、川口・大曾根ともに同意見である。ところが大曾根注は「柳花」を春さきの黃色い花を指すと考え、前後矛盾する。これは、『六注』の「柳ノ花ハ黃色也」の解釋と同じであるが、誤りである。唐詩の世界では、柳花（楊花）はしばしば柳絮（柳の實〔種子〕についた白い綿毛）の意味で用いられ、晚春、春風にのって雪のごとく舞い散るイメージをもつ。晚春三月（舊曆）、柳の實が熟すると、實についていた白い綿毛が枝を離れて風に飛散する光景である。『〔神農〕本草經』卷下（森立之輯）に「柳華、一名は柳絮」とあり、[47]『抄注』にもすでに「柳花トハ柳絮ナリ」という。川口注に「柳のわた」とするのが正しい。柳絮を歌った詩句を一例あげると、白居易の「舒三員外の長句を贈られしに酬ゆ」（卷31、後集卷12）に、「楊柳の花は飄る　新白雪、櫻桃の子は綴る　小紅珠」とある。詳しくは、拙著『唐詩歲時記―四季と風俗』（明治書院、一九八〇）九四頁參照。

ところで、氣にかかるのは、川口・大曾根ともに「拂水柳

花千萬點」の句を靜的な光景に譯すことである。たしかに清の吳其濬『植物名實圖考』卷三三、柳の條に、

絮に飛揚する者有り、亦た枝に就きて團簇（むらがる）する者有り。俗に以て雌雄と爲す。

とある。しかし、唐詩における柳絮のイメージは管見によるかぎり、ほとんどすべて動的である。したがって、この元稹の句も、靜的な光景ではなく、「無數の柳絮が水面をかすめ飛ぶ」動的な風景として捉えるべきであろう。「拂」の字は、『楚辭』「離騷」の「折若木以拂日兮」に對する王逸注に、「擊つなり。一に蔽ふと云ふなり」とある。またこの場合、張說の詩（「奉和聖制初入秦川路寒食應制」）に、「渭（水）に臨む桃花　水を拂ひて飛ぶ」とある表現も參考になろう。

○〔柳花・柳絮〕　大曾根注の誤解は、おそらく、『新釋』にも引く山本北山の『孝經樓詩話』卷下（日本詩話叢書所收）にみえる次の記事と關連していよう。

柳絮ト柳花ト別ナルコト、升菴集ニ見ユ。其ノ本ハ、宋ノ楊伯嵒ガ臆乘ニ云フ、「柳花ト柳絮トハ、迥然トシテ同ジカラズ。葉間ニ生ジテ穗ヲ成シ、鵝黃色（鵝鳥の雛の黃色、やわらかな淡黃色）ヲ作ス者ハ、花ナリ。花既ニ褪リテ蔕ニ就イテ實ヲ結ブ。其ノ實ノ熟シテ亂飛　綿ノ如キ者ハ、絮ナリ。古今ノ吟咏、往々絮ヲ以テ花ト爲シ、花ヲ以テ絮ト爲シ、素ト分別無シ。一笑ヲ發スベシ。[48]

この指摘は、すでに唐の開元二七年（七三九）に成る陳藏器『本草拾遺』（『重修政和經史證類備用本草』卷十四所引）のなかに、「（柳）花は卽ち初めて發きし時の黃蕊、子は飛絮爲り。絮を以て花と爲すは、其の誤り甚だし」とみえる。いわば嚴密な本草學上の「柳花」は早春の風景である黃蕊、柳絮は晚春の風景である飛絮をいう。しかし、元稹の詩句は明らかに暮春の風景である以上、元稹も當時の慣例にしたがって混用したと考えてよい。二四不同などの韻律に對する配慮も當然存在しよう。花は平聲、絮は仄聲。

○〔鶯舌〕　白居易「追歡偶作」詩（卷34、後集卷15）にも、「十たび春啼の　鶯舌を變ずるを聽く」とある。

（未完）

〈注〉

（1）川口久雄『和漢朗詠集』（講談社學術文庫、一九八二年刊）も、いちおう通覽し、『文庫』本と略稱する。

（2）白詩の卷數は、顧學頡校點『白居易集』四册（中華書局、一九七八。南宋の紹興年間刻『白氏長慶集』七一卷本を底本とした校本）と清の汪立名編『白香山詩集』（世界書局、一

九七八年四版）にもとづく。ただし、所收卷數を同じくする場合は一つのみ注記。異なる場合は顧學頡本を前に書く。なお、わが國の和刻本は前者、佐久節の全譯本は後者の卷數と同じ。白居易の文は、後者には未收なので、當然前者の卷數を注記する。以下、同じ。

（3）韋莊「乞彩牋歌」に「留得溪頭瑟瑟波、潑成紙上猩猩色」とあるのも、「波だつ音の形容」ではない。

（4）『廣韻』下平聲・二十一侵韻と去聲・五十二沁韻の條や、王力『漢語詩律學』第十二節「聲調的辨別」の條（一四二頁）參照。一九七三年、中華書局香港分局刊。

（5）新典社叢書一〇、山內潤三ほか編に收める影印本に據る（一九八二年刊）。ちなみに、本書以下の舊注は、印刷と理解の都合上、表記に多少の手を加えてあることを銘記しておきたい。補訂稿作成の目的の一つに、今日の使用にたえる舊注を平易に紹介することがある。

（6）繆鉞『杜牧選注』（北京人民出版社、一九五七）の「前言」の注にいう、「唐文宗年號、或作『太和』、或作『大和』、應以『大和』爲是。潛研堂金石文跋尾（錢大昕著）卷八『李渤留別南溪詩』跋語云、『唐文宗紀年、本云「大和」、予所見石刻、無有作「太」者、今新舊史・通鑑皆譌作「太」字、當據石刻正之』。楊氏景蘇園影宋刊本樊川文集・四部叢刊影明刊本樊川文集、均作『大和』。〔　〕內は引用者注。いま、この說に從う。

（7）長安の坊の場合も、上揭の二書參照。拙稿完結の折には、地圖を揭載する豫定。

（8）『元河南志』卷一に引く韋述の記（『兩京新記』の逸文）。

（9）中國社會科學院考古研究所洛陽工作隊「隋唐東都城址的勘查和發掘」續記」（『考古』一九七八―六）。

（10）日野開三郎「唐代大城邑の戶數規模に就いて―特に長安を中心とする」（九州大『東洋史學』二七號、一九六四）參照。

（11）表記の一部を印刷の都合上改めていることは、前揭の『和漢朗詠集』の舊注（寫本）と同じ。以下、同樣である。

（12）湯淺廉孫『初學漢文解釋ニ於ケル連文ノ利用』（文求堂刊）二八五頁參照。

（13）『辭源』修訂本第四册（北京商務印書館、一九八三）參照。

（14）弘前大學教養部『文化紀要』十七號、一九八三年所收。

（15）（13）の注參照。

（16）『樂府詩集』卷三七所收。余冠英選注『樂府詩選』には、「計會」の意を「算也」とする。ただし、前揭の『辭源』は「思慮、盤算」の意とする。

（17）彙文堂書店、一九七七年。

（18）齊魯書社、一九八〇年。

（19）元稹詩の卷數は、冀勤點校『元稹集』（中華書局、一九八二）に據る。以下、同じ。

(20) この無賴は、王鋏『詩詞曲語辭例釋』增訂本（中華書局、一九八六）に、「等于說可喜・可愛」云々と指摘する用例にあたる（二四九頁）。たまらなく魅惑的の意。

(21) 『抄注』の讀みに從う。

(22) 顧學頡「白居易年譜簡編」（『白居易集』所收）に、貞元十九年の作とするのは、汪立名の誤りを踏襲したもの。羅聯添「白香山年譜考辨」（『大陸雜誌』三一卷三期）參照。

(23) 冀勤點校『元稹集』卷16には、「煩」を「疑うらくは誤りか」とする。岑仲勉「全唐詩札記」（『唐人行第錄』所收）は、「唐・宋人皆諱〈恒〉、作〈煩〉亦未定可信」とする。

(24) 宋の楊伯嵒『臆乘』の「行第」の項參照。

(25) 呂穎は前揭の呂炅の弟。岑仲勉『元和姓纂四校記』卷六參照。

(26) このときの主考官は、吏部侍郎の鄭珣瑜。

(27) 白居易の進士及第は貞元十六年（八〇〇）である。

(28) 村上哲見『科擧の話』にいう、「科擧と吏部試と制科とは、制度としてタテの關係でつながっているわけではないのだが、實際問題として、中唐以後の官僚の出世コースというものを考えてみると、まず科擧の進士科に上位で及第し、ついで吏部の宏詞科または拔萃科に優等で及第すれば、いちおうキャリアコースに乘ったといえるが、さらに機會があって制科に應じ、これに優秀な成績を擧げればいっそう拍車をかけることになる」（七一頁）と。

(29) 中華書局香港分局ほか刊、一九八七。

(30) 市原亨吉「東都留守時代の裴度の生活」（『東方學報』〔京都〕第三六册）參照。

(31) 宋の洪邁『容齋續筆』卷三、詩文當句對の條に、「唐人詩文、或於一句中自成對偶、謂之當句對」とある。

(32) 趙超「唐代洛陽城坊補考」（『考古』一九八七―九）には、洛陽・河南の、いわゆる郭下縣の管轄地域に對する新見解が述べられている。

(33) 國學院大『漢文學會會報』三一輯、一九八六年所收。

(34) 唐の鄭處誨『明皇雜錄』逸文（守山閣叢書）參照。

(35) 白居易「新樂府五十首」の一（卷三）。

(36) 『長安・洛陽物語』一九八頁以下、『唐詩の風土』一〇七頁以下參照。

(37) 『新唐書』卷八三、諸帝公主傳に、華陽公主は「大曆七年（七七二）、病を以て道士と爲らんことを乞ひ、瓊華眞人と號す」とある。

(38) 靳極蒼『唐宋詞百首詳解』（山西人民出版社、一九八二）には、「〈紅燭背〉就是紅燭見背時、就是熄灯時」という。なお、周汝昌選注『楊萬里選集』（中華書局香港分局、一九七二年）には、「夜坐」詩の「背壁青燈勸讀書」に對して、〈「背〉義有二、爲物（如幔帳）所隔、靠倚而立。此爲後一義〉

とする。一九六二年版の復刻。

(39) 人民文學出版社、一九八六。

(40) 村上哲見『李煜』には、この句を「窓のかげにひっそりとともる灯は明かるくまた暗く、ひとしおわびしさをそそる」と譯し、「窓に背りて灯は半ば明らかなり」と讀む。

(41) 宋の吳曾『能改齋漫錄』卷六、事實の條の「桃花水」參照。陳の江總「烏棲曲」にも「桃花春水木蘭橈」とあり、孟浩然「送元公之鄂渚、尋觀主張驂鸞」詩にも、「桃花春水漲」とある。拙稿「唐宋田園詩詞札記」(下)(弘前大學人文學部『文經論叢』第二十一卷第三號、一九八六年)の(8)の條參照。

(42) 嚴耕望『唐代交通圖考』第四卷(一九八四年刊)一〇六二頁。

(43) 注(10)の論文參照。

(44) 檢校とは、祿米を支給する基準になる職事官を帶びさせたことをいう。これは、令外の官である使職には官品がなかったためである。

(45) 『世說新語』識鑒篇の劉孝標注に引く『(孟)嘉別傳』など參照。

(46) 元稹「答姨兄胡靈之見寄五十韻」詩(卷11)の原注に、「龍山落帽臺去(江陵)府二十里」とある。『嘉慶重修一統志』卷三四四、荆州府の古蹟「落帽臺」の條參照。

(47) 松本一男訓註『新刻校補　神農本草經』(昭文堂、一九八四)に據る。

(48) 訓讀し、表記を一部改める。また『叢書集成新編』(新文豐出版公司)所收の『臆乘』によって、鵝黃色の「色」字を補い、また「帶」を「蔕」に正す。引用文中の「葉間ニ生ジテ穗ヲ成シ、鵝黃色ヲ作ス者ハ、花ナリ」の記述は、すでに九番の詩の「柳眼」の條に引用した顧宸の說「柳始めて嫩蕊を生ずるや、其の色は黃、……未だ葉あらずして先づ花さく」とやや異なる。中國の北方と南方の風土的差異か。明の王象晉纂輯『群芳譜』木譜・柳の條には、「春初生柔荑、粗如筋、長寸餘、開黃花、鱗次荑上、甚細碎、漸次生葉。至晚春、葉長成、花中結細子如粟米大、細扁而黑、上帶白絮如絨、名柳絮、又名柳絨、隨風飛舞」とある。いま、伊欽恒『群芳譜詮釋』(增補訂正)農業出版社、一九八五による。清初の陳淏子輯『花鏡』卷三・柳の條にも、ほぼ同じ文が見える。

(補注1) 章孝標「上浙東元相」詩(『全唐詩』卷五〇六)に「雪晴山水勾留客、風暖旌旗計會春」とあり、『千載佳句』卷上、四時部・早春には、傍點部を「鶯聲」に作る。「計會」の用例を一つ補っておく。

(補注2) 清の錢大昕『恒言錄』卷二、疊字類(同義語を重ねたもの)の「來由」の條に、この白詩の用例をあげる。